

2-3大小セット！鉄の鏃（やじり）

九州歴史資料館 飛び出すむかしの宝物 解説シート

てつ ぞく 鉄 鏃

筑後産の鉄鏃



出土 遺跡 いせき 筑前町 藤坂 古墳群 ふじさかこふんぐん

藤坂 I - 1号墳の横穴式石室から出土した鉄鏃です。鉄鏃は矢の先端に付ける鉄製の鏃で、古墳時代後期にはいろいろな形態のものが存在します。大きく分けて、大型で鏃身幅の広い 平根鏃 と細長い 尖根鏃 の 2種類があり、おのの鏃身部の形から細かく分類されます。

これらの鉄鏃は6世紀前葉から7世紀前葉のもので、平根鏃のうち最も古いものは先端の山形が鋭角の直刃 圭頭 けいとう 鏃で、6世紀前葉に福岡平野南部から筑後地域に広く見られるものです。これに次ぐ6世紀中葉から後葉のものは、先端の山形が鋭角の曲刃圭頭鏃で筑後地域に集中的に見られ、この地域で作られたものと考えられます。このほか、6世紀後葉の5角形鏃と6世紀末から7世紀前葉の鑿のよ おののや うな形の 斧箭鏃 があります。5角形鏃と斧箭鏃には、同じような三角形の透かし孔が開けられていることと、小規模な古墳であること



X線 CT スキャン画像

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



から、やはり地元で作られたものでしょう。

ひらねぞく とがりねぞく
平根鏃と尖根鏃

古墳時代中期後半に尖根鏃が普及すると、実戦用の尖根鏃十数本に対して2から3本の平根鏃がセットとして副葬されることが多いです。尖根鏃は実戦用の矢で「征矢」といい、これに平根鏃が「表差」の矢として数本添えられて矢一式とする習俗がこの頃に成立していたようです。

平根鏃は、尖根鏃に比べて大型で先端が鋭く尖っていないので、遠くまで飛んで刺さるという矢の役割を果たしていましたので特殊な用途に使われていたと考えられています。「表差」の矢は、戦いのはじまりの儀式である「矢合わせ」で打ち合う「嚆矢」として使われたり、魔を払う儀式にも用いられていました。

「矢合わせ」については『平家物語上巻 卷第七 五』「俱利伽羅落しの事」に書かれています。

さるほどに、源平両方陣を合す。陣のあはひわづか三町ばかりに寄せ合せたり。源氏も進まず、平家も進まず。ややありて、源氏の方より、精兵すぐって十五騎、盾の面に進ませ、十五騎が上矢の鏃を、ただ一度に平氏の陣へぞ射入れたる。

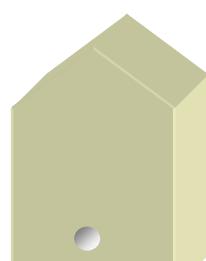
平家も十五騎を出いて、十五の鏃を射返さす。源氏三十騎を出いて、三十騎の鏃を射さすれば、平家も三十騎を出いて、三十の鏃を射返さす。源氏五十騎を出せば、平家も五十騎を出し、百騎を出せば、百騎を出す。両方百騎づつ陣の面に進ませ、互に勝負をせんとはやりけるを、源氏の方より制して、わざと勝負をばせさせず。

このように、「表差（上矢）」は儀式的に打ち合うものですが、現代の破魔矢のように完全な儀器ではなく大きな刃がついているので当たれば傷を負わせることができたでしょう。

平根鏃は、儀式を重んじた古代の戦いならではの武器といえます。

けいとうぞく
圭頭鏃

「圭」とは古代中国の儀礼に用いた玉の一種で、頭部が山形に尖っているものです。この形からとったものが「圭頭」です。鉄の板の先端を山形に鑿（さ）で落として、切断した部分を研いで刃にするという単純な形態であるため弥生時代後期から九州に多く存在しています。



中国古代の玉 圭